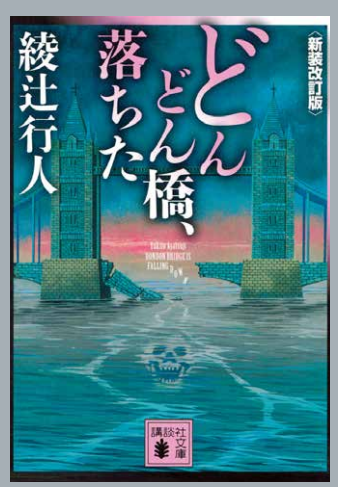
優秀賞

— 高校生の部 —

「来世の自分へ送る手紙」

宮﨑智生さん

推　し　本：『どんどん橋、落ちた』
　　著　　：綾辻行人
推したい相手：来世の自分



「来世の自分へ送る手紙」　宮﨑智生

この本を読んだ時の衝撃を、きっと私は忘れることはできないだろう。その為、私はこの本を一番に他の誰でもない来世の自分へ推したい。この本は所謂ミステリー小説だ。しかし、純粋にミステリー小説として読んでしまっては謎は解けない。文字だけの情報では事件が解決しないのだ。現実でも、事件がニュースとして取り上げられ新聞やネットニュースなど文字に起こされる時には必ずと言っていいほど情報の欠落が生まれる。だからこそ、よく情報を鵜呑みにしてはいけないと言う。それが小説でも起こってしまうのがこの本だ。文字に書かれた情報をそのまま鵜呑みにしてはいけない。固定観念をなくし、真実を読み取る力が必要不可欠となる。しかし、謎を解くためには文字に起こす段階で失われた情報を補わなければいけない。その情報の補い方がこの本は衝撃的だった。隅々まで読まなければ、いや、隅々まで読み尽くしてもなかなか気づけない、日本語の違いや本に情報が置き換えられたから発生する新しい情報。例えば「殺し」と「殺人」は似ているようで含まれる意味が若干異なること。本が含む時の情報で軽視されがちな句読点、読点、鍵括弧などの重要性。純粋に謎解きをしようとすればするほど、どんどん作者のツボにハマっていく。単なる物語ではなく本を読んでいたんだとふと気づいた時のあの気持ちを、忘れたくても忘れられない衝撃を抱える自分の代わりに来世の自分にもう一度味わって欲しい。そして一味も二味も変わった日本語の面白さ、本の面白さにもう一度出会うだろう。また、私はこの本で味わった忘れることができないくらいの衝撃を他の人にも伝えるべく、ビブリオバトルという知的書評合戦に何度か参加したことがある。その際、この本の魅力を伝えるにあたり何度も読み返して吟味してみたが、読めば読むほどやっぱりこの本は凄いと思わされた。トリックが斜め上の発想かつ、とても綺麗にはまっていたからだ。あちこちに、そして奇想天外なところに散りばめられた伏線は 2 回読むだけでは回収しきれない。何度も読めば読むほど新たに伏線となっていた箇所に気づき、トリックの綺麗さに感動している自分がいた。謎が解けなかった悔しさよりも綺麗な謎解きだったという感動

の気持ちの方が勝ったのは人生において初めての経験だったと思う。実際にビブリオバトルで本の魅力を紹介する時も制限時間の5分で収めるのがとても難しかった。練りに練った構想を直前に削ったり抜粋する箇所を変えたりすることになったのも、きっとこの本に5分では表現しきることができない面白さが詰まりすぎていたからだろう。5分間の紹介の後に沢山オーディエンスからの質問があったのもこの本が魅力で溢れていることを確信した瞬間であった。さらに、実を言うと私は人前に立つのが苦手だ。しかしビブリオバトルは全校の前、更には全校の発表の際に選出された為、市の代表として行った。それでもやっぱりビブリオバトルに出たいという思いがあったのはこの本になかなか行動しない私を動かすほどの力があったからだ。この本のお陰で本好きの友達も増えた。よく、丸々を始めたら人前で話せるようになって友達も出来ましたという怪しさ満点の広告を見かけるがまさにそれだ。言葉には力がある。そしてその力を引き出してくれたのがこの本だった。内気な自分に、他の人にもこの本の魅力を紹介したいと思えた。そんな人生を動かす本だとは買った時は思いもしなかったけれど、やはり来世の自分には「いいから読んでみなよ」と言って渡す今の自分がいるだろう。このように、この本は私にとって今まで感じたことのない衝撃や、人前に立つことが苦手な私に原動力を与えてくれた本だ。まさに人生を変えてくれた本であり、しかしながら読んでみないとこの本の魅力に気付くことはなかっただろう。こんな本があったんだという衝撃、そしてその感情が自分自身を動かすものであることをもう一度身をもって体感してみたい。残念ながらこの忘れられない感情を抱える私では、再度読んで感動することはできても、もう二度と初見の時の驚きを体感することはできないだろう。だからこそ、来世の自分へこの本を推したい。それは自分の人生に新たな色が加わるだろうから。